

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520472

研究課題名(和文)日本語方言における重ねことばの研究

研究課題名(英文) Research of "Kasane-kotoba" (repeated words with similar sounds) in Japanese Dialect

研究代表者

上野 智子 (Ueno, Satoko)

高知大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：20127616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：日本語方言には多くの擬態語・擬声語(オノマトペ)が地域差を内包しながら、多く存在する。なかでも、「ぺちゃくちゃ」におけるような、単純反復ではなく、一部の音を変えて反復する異形反復形式のオノマトペに注目し、北海道を除いた46都府県の文献調査を実施した結果、次のような所見を導き出すことができた。

1 東北・北陸・九州地方は他の地方にくらべて、より多彩な異形反復形式のオノマトペを保有している。2 人間の言動・性情に関する意味分野に多く栄えている。3 江戸時代まではさかのぼることのできるオノマトペが多いようである。なお、3は今後の研究において、明らかにできる可能性が高い。

研究成果の概要(英文)：In Japanese dialects, numerous onomatopoeic words can be found with great variation in different parts of Japan. This research focused particularly on certain types of onomatopoeic words such as "Pecha - Kucha". They are formed by not just simply repeating the same word twice, but rather by two words with very similar yet slightly different sounds (Ikei-hanpuku onomatopoeia). Research on reference books and articles in 46 prefectures excluding Hokkaido has been conducted and the followings were observed: 1. Tohoku, Hokuriku, and Kyusyu regions are a rich source for "Ikei-hanpuku onomatopoeia" with respect to its quantity and quality. 2. "Ikei-hanpuku onomatopoeia" is dominantly found in words describing human behavior, speech, and personality. 3. Many "Ikei-hanpuku onomatopoeia" have a long history of usage that dates back to at least the Edo-period.

Future studies may shed light on when and how these "Ikei-hanpuku onomatopoeia" started to develop.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：重ねことば 日本語方言 地域性 異形反復形式 オノマトペ 副詞

1. 研究開始当初の背景

(1)「重ねことば」とは、異音くり返しの形態をもつ語(句)で、従来の文法概念では副詞としてとらえられることが多いものの、「連語」や「置語」など文法とは無関係の分類枠に入れられるなど、明確な定義づけが行われていない語群を指す名称として用いる。

(2)具体例の一端をあげれば、「かちやねくちやね」(青森)もちえこちえ(宮城)あつばあとつば(茨城)ねんじこんじ(栃木)えつたんぼつたん(新潟)あくさもくさ(滋賀)ぐやすやく(鳥取)へんにやごんにや(香川)など、方言辞典や方言集に集録されやすい語彙である。

(3)日本語一般にもその例は散見されるが、日本語方言においては、形態・意味内容ともに多彩な様相を見せている。日本語・日本語方言ともに、この「重ねことば」すなわち異形反復形式のオノマトペに焦点を絞った研究は皆無であるため、本研究への着手の意義は大きい。

2. 研究の目的

(1)語例の収集作業を基礎作業として、これらがどのような特徴をもった語彙・文法事象であるのかを明らかにするために、全国方言を視野に入れた包括的調査研究を展開する。そのための基本方針は次の3点である。

- 形態面からの整理・分析
- 意味上の特性の分析・解明
- 地域特性の抽出と一般特性の帰納

(2)日本語史上での位置づけを行う。そのための手順は以下のとおりである。

- 副詞研究史との比較検討
- 擬声・擬態副詞(オノマトペ)研究との関連

3. 研究の方法

(1)北海道を除く46都府県の公立図書館所蔵の各地方の方言集および市町村史に収められている「方言」の悉皆調査を目指した。

(2)時間の制約が大きく、期日内に終われないものについては、事後、図書館相互の貸借利用を駆使して、できるかぎり多くの資料を調査することに努めた。

(3)当初は文献調査を行った後、主要な語例については、現地で確認調査を実施する予定であったが、文献調査にすべての時間を投入せざるをえない状況に至り、完遂できなかった。

4. 研究成果

(1)北海道を除く都府県の調査がほぼ完了し

た。文献数量に大きな格差があり、方言集などに多く恵まれた県とそうではない県があることも事実だが、方言資料の差は該当語例の数量差に比例するような結果が得られた。延べ語数の単純な比較を行ったものが図1である。

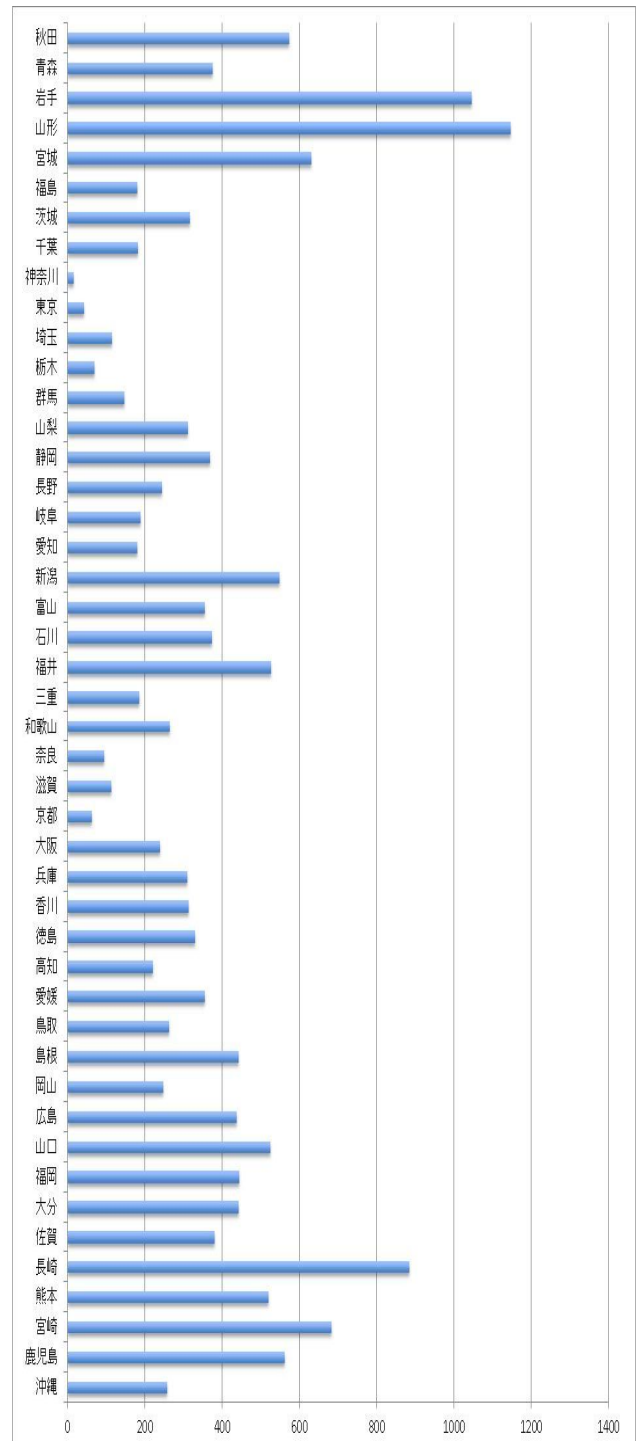


図1 都府県別延べ語数

(2)図1から、東北・北陸・九州地方は他の地方にくらべて、より多彩な異形反復形式のオノマトペを保有していることがわかる。これは中央に位置する府県よりも周辺に位置する県の方に栄えているということになる。この傾向はそのまま方言色の強さの一

般的傾向と表裏一体の関係にあるものと推察される。つまり、中央から離れた周辺地方にいくほど、異形反復形式のオノマトペの種類と数が多くなる。

(3)図1をさらに詳しく見ると、まず東北に大きな核があり、次は九州、さらに北陸というように、三つの地方を中心に異形反復形式のオノマトペの勢力を確定できる。関東・中部・近畿・四国・中国は東北・北陸・九州の間をうめるような勢力展開にとどまり、なかでも関東や近畿は語例・語数ともふるわない。

(4)このように日本語方言内部に精粗があり、したがって地理的変異は大きいことが予想される。ちなみに方言を離れて、共通語にどのような例が存在するか、手元のデジタル大辞泉(小学館)の全見出し語に当てみると、約70語が該当する語と判断できた。

(5)しかし、この中には「ぺちゃくちゃ」「じたばた」「やきもき」「ぎくしゃく」「あやふや」など、日常さかんに見聞きする語と、はじめて知るような語とがあり、後者の出典は滑稽本・洒落本・浄瑠璃・歌舞伎など江戸時代の口語文体の文学作品に集中していることがわかった。したがって、方言との関係を見るためにも、歴史的な変異の視点を導入しなければ、異形反復形式のオノマトペの全容は見通せないことが明らかである。

(6)Yale 大学 East Asian languages and Literature の、朝鮮語担当 Senior Lecturer、SEUNGJA KIM CHOI 氏と中国語担当 Senior Lecturer、PEISONG XU 氏にこの観点についてのインタビューを行ったところ、いずれの言語にもオノマトペはあるがすべて単純なくりかえしであり、日本語に認められるような異形態のくりかえしはない、という答えが返ってきた。少なくとも3つの言語間では日本語に特有の形態ということになる。

(7)しかしながら、異形反復形式のオノマトペが日本語のみに多彩であるという結論を導くことは早計である。日本語のみならず、他言語においてもこの現象に関心が示されない傾向が大きく、存在しても未だ報告すらなされていない言語が多いのではないかと推測されるからである。日本語に特有の形態と考えるよりも言語に普遍的な現象ととらえる姿勢が、この問題解決の道を開く鍵になると考える。

(8)膨大なデータの本格的な解析はこれからであるが、すでに判明しているのは、このオノマトペが人の言動や性情を表しやすいという特徴である。単純くりかえしのオノマトペとの厳密な比較を経なければ結論を出せないものの、擬音語のような単純な物

音の描写にはあらわれにくい傾向ではないかと判断される。

(9)これまで、日本語オノマトペに関する研究では、歴史的研究を中心に、山口仲美氏の精力的な研究が大きな成果をあげてきた。その著書だけでも『ちんちん千鳥のなく声は-日本人が聴いた鳥の声-』『犬は「びよ」と鳴いていた』『暮らしのことは 擬音・擬態語辞典』『中国の蝉は何と鳴く?』『「擬音語・擬態語」使い分け帳』のように数多く、擬音語に比重がかかった感はあるものの、歴史的推移を詳細に記述している点が特筆される。

(10)上記文献にも学びながら、これまでは全く顧みられなかったと判断される、異形反復形式のオノマトペに光を当てれば、あらたな日本語オノマトペの問題点の抽出が可能になる。なにゆえに異形態を用いる必要があるのか、その表現効果はいかなるものなのか、など、解明すべき課題は多く、日本語の語彙研究・副詞論・音韻論、日本語教育に寄与できるのではないかと考える。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者

上野智子 (UENO, Satoko)
高知大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：20127616

(2)研究分担者
なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者
なし ()

研究者番号：